

劉孝綽詩譯注 (7)

前稿「劉孝綽詩譯注(6)」(『中國古典文學研究』第5號)では、「32歸沐呈任中丞昉」「33憶虞弟」「34淇上戲蕩子婦」「35愛姬贈主人」「36爲人贈美人」「37遙見鄰舟主人投一物衆姬爭之有客請余爲詠」「38古意」の七首を取り上げたが、本稿では以下の八首を取り上げる。

- 39 報王永興觀田
- 40 詠有人乞牛舌乳不付因餉檳榔
- 41 夜不得眠
- 42 望月有所思
- 43 校書祕書省對雪詠懷
- 44 詠百舌
- 45 侍宴同劉公幹應令
- 46 賦詠百論捨罪福詩

39 報王永興觀田 王永興の觀田に報ふ

1 重門寂已暮 重門 寂として已に暮れ

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 2 | 案牘罷囂塵 | 案牘 囂塵に罷む |
| 3 | 輕涼生筍席 | 輕涼 筍席に生じ |
| 4 | 微風起扇輪 | 微風 扇輪に起くる |
| 5 | 浮瓜聊可貴 | 浮瓜 聊か貴ぶ可く |
| 6 | 溢酒亦成珍 | 溢酒 亦た珍と成す |
| 7 | 復有寒泉井 | 復た寒泉の井有り |
| 8 | 兼以瑩心神 | 兼ねて以て心神を瑩かん |
| 9 | 睠彼忘言客 | 彼の忘言の客を睠るに |
| 10 | 閒居伊洛濱 | 伊洛の濱に閒居す |
| 11 | 顧已慙因地 | 己を顧みるに地に因るを慙ぢ |
| 12 | 徒知薑桂辛 | 徒だに薑桂の辛きを知るのみ |
| 13 | 但願崇明德 | 但だ明德を崇くして |
| 14 | 無謂德無鄰 | 德に鄰無しと謂ふ無きを願ふのみ |

《和譯》

- 1 九重の門は靜かに暮れていき
- 2 官府の仕事も世俗の中で終えることとなつた
- 3 竹のむしろに座ると少しばかりの涼しさを感じ

佐伯雅宣
佐藤利行

- 4 團扇がかすかな風を起こしている
- 5 水に浮べた瓜は貴重なものであり
- 6 杯に溢れる酒もまた珍重される
- 7 その上また冷たい泉の井戸があるので
- 8 その水で心を磨くことにしよう
- 9 かの忘言の友たるあなたを見ると
- 10 伊水・洛水のほとりでくつろいでいる
- 11 自分自身を顧みると地にたよるばかりで慙ずかしく思い
- 12 ただ薑桂の辛さのようなあなたの天賦の才を思い知るばかりです
- 13 私はただひたすらに自分の徳を高めて
- 14 隣に徳ある人がいないなどと言われないよう願っています

《解題》

〔王永興〕未詳。『魏書』恩倖傳に「(王)誕弟殖、字永興。司空城局參軍」(誕の弟殖、字は永興。司空城局參軍なり)とあり、王殖、字は永興なる者がいるが、北魏の人物でもあり、劉孝綽との關係は定かではない。あるいは揚州會稽郡永興縣の令となつた王某を指すとも考えられるが、史書のなかに該当の人物は見あたらない。

この詩は王永興の「觀田」詩に答えたものと思われるが、もとの詩も不明。

《語釋》

1 重門寂已暮 2 案牘罷囂塵

〔重門〕九重の門。宮城の門。謝朓「觀朝雨」(『文選』卷三〇)に「平明振衣坐、重門猶未開」(平明衣を振ひて坐するも、重門猶ほ未だ開かず)とある。

〔案牘〕官府の文書。謝朓「冬日晚郡事隙詩」(『謝宣城詩集』卷三)に「案牘時間暇、偶坐觀卉木」(案牘時に閒暇にして、偶たま坐して卉木を觀る)とある。

〔囂塵〕俗世間を指す。謝朓「之宣城出新林浦向版橋」

(『文選』卷二七)に「囂塵自茲隔、賞心於此遇」(囂塵茲れ自り隔たり、賞心此に於て遇はん)とあり、李善

注には『左氏傳』を引き、「景公謂晏子曰、子之宅湫溢囂塵」(景公晏子に謂ひて曰く、「子の宅湫溢にして囂塵なり」と)という。

〔罷〕仕事をやめる。劉孝綽はしばしば官を免ぜられており、あるいはその時の作か。

3 輕涼生筍席 4 微風起扇輪

〔筍席〕竹の皮で作つた席。『尚書』顧命に「西夾南嚮、敷重筍席」(西夾に南に嚮ひて、重筍席を敷く)とあり、孔穎達疏に「取筍竹之皮以爲席也」(筍竹の皮を取りて以て席を爲るなり)という。

〔微風起扇輪〕「微風」は、かすかな風。「扇輪」は、團扇。班婕妤「怨歌行」(『文選』卷二八)に「裁爲合歡扇、團團似明月。出入君懷袖、動搖微風發」(裁ちて合歡の扇と爲せば、團團として明月に似たり。君が懷袖に出入し、

動搖して微風發す」とある。

5 浮瓜聊可貴 6 溢酒亦成珍

〔浮瓜〕水に浮かべた瓜。魏文帝「與朝歌令吳質書」(『文選』卷四二)に「高談娛心、哀箏順耳。馳騁北場、旅食南館。浮甘瓜於清泉、沈朱李於寒水」(高談 心を娛しましめ、哀箏 耳に順ふ。北場に馳騁し、南館に旅食す。甘瓜を清泉に浮かべ、朱李を寒水に沈む)とある。

〔溢酒〕杯に溢れる酒か。用例未見。

〔成珍〕貴重である。珍重される。何遜「西州直示同員詩」(『古詩紀』卷九三)に「矛盾交爲論、光璧帶成珍」(矛盾交はりて論を爲し、光璧帯びて珍と成す)とある。三、六句は郊外における酒宴の様子でないかと思われ

7 復有寒泉井 8 兼以瑩心神

〔寒泉井〕冷たい水の井戸。

〔瑩心神〕心を洗い清める。

この二句は左思「招隱詩二首」其二(『文選』卷二二)に「前有寒泉井、聊可瑩心神」(前に寒泉の井有り、聊か心神を瑩く可し)とあるのを踏まえる。その李善注には「周易曰、井冽寒泉。廣雅曰、瑩、磨也」(周易に曰く、「井冽として寒泉あり」と。廣雅に曰く、「瑩は、磨なり」と)という。

9 睠彼忘言客 10 閒居伊洛濱

〔忘言〕言葉を忘れる。『莊子』外物篇に「言者所以在意、得意而忘言。吾安得夫忘言之人而與之言哉」(言は意に在る所以、意を得て言を忘る。吾安んぞ夫の忘言の人を得て之と與に言はんや)とある。轉じて言葉を必要としなほほど親しい閒柄をいう。『晉書』山濤傳に「與嵇康・呂安善、後遇阮籍、便爲竹林之交、著忘言之契」(嵇康・呂安と善く、後に阮籍に遇ひ、便ち竹林の交を爲し、忘言の契を著す)とある。『忘言客』とは、王永興を指すか。

〔閒居〕くつろぎ休む。『漢書』司馬相如傳に「未嘗肯與公卿國家之事、常稱疾閒居、不慕官爵」(未だ嘗て肯て公卿國家の事に與からず、常に疾と稱して閒居し、官爵を慕はず)とある。

〔伊洛濱〕伊水と洛水のほとり。仙人王子喬が遊んだところ。『列仙傳』卷上に「王子喬者、周靈王太子晉也。好吹笙作鳳凰鳴、遊伊洛之間」(王子喬は、周の靈王の太子晉なり。好みて笙を吹きて鳳凰の鳴を作し、伊洛の間に遊ぶ)とある。

11 顧己慙因地 12 徒知葦桂辛

〔顧己〕自らを顧みる。謝靈運「從遊京口北固應詔」(『文選』卷二二)に「顧己枉維繫、撫志慙場苗」(己を顧みるに枉げて維繫せられ、志を撫して場苗に慙ぶ)とあり、李善注に「鄭玄毛詩箋曰、顧、念也」(鄭玄毛詩箋に曰く、「顧は、念なり」と)という。

「因地」『詩紀』『先秦漢魏晉南北朝詩』を初め、諸本すべて「因地」に作る。しかしこの二句は次に引く『韓詩外傳』に基づくと思われることから、今改める。

「薑桂」しようがや肉桂。『韓詩外傳』卷七に「夫薑桂因地而生、不因地而辛。女因媒而嫁、不因媒而親」（夫れ薑桂は地に因りて生ずるも、地に因らずして辛し。女は媒に因りて嫁するも、媒に因らずして親し）とある。また『文心雕龍』事類篇に「夫薑桂因地、辛在本性。文章由學、能在天資。才自内發、學以外成。有學飽而才餒、有才富而學貧。學貧者、迺遭於事義、才餒者、劬勞於辭情。此内外之殊分也」（夫れ薑桂は地に因るも、辛は本性に在り。文章は學に由るも、能は天資に在り。才は内自り發し、學は外を以て成る。學飽きて才餒うるもの有り、才富みて學貧しきもの有り。學貧しき者は、事義に迺遭し、才餒うる者は、辭情に劬勞す。此れ内外の殊分なり）とある。

この二句は「地に因る」、つまり才能の乏しい自分を恥じ、王永興を「薑桂辛し」、すなわち天賦の才を持つと讃えているのではないか。

13 但願崇明德 14 無謂德無鄰

「崇明德」徳を高める。李陵「與蘇武詩三首」其三（『文選』卷二九）に「努力崇明德、皓首以爲期」（努力して明徳を崇くせん、皓首以て期と爲さん）とある。

「德無鄰」この語は『論語』里仁篇に「德不孤、必有鄰」

（徳は孤ならず、必ず鄰有り）とあるのに基づく。

40 詠有人乞牛舌乳不付因餉檳榔

人有り牛舌乳を乞ふも付せず 因りて檳榔を餉る
を詠ず

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 1 | 陳乳何能貴 | 陳乳 何ぞ能く貴ばん |
| 2 | 爛舌不成珍 | 爛舌も珍と成さず |
| 3 | 空持渝皓齒 | 空しく持して皓齒を渝ふ |
| 4 | 非但汙丹唇 | 但だに丹唇を汙すのみに非ず |
| 5 | 別有無枝實 | 別に枝無きの實有り |
| 6 | 曾要湛上人 | 曾て湛上の人に要む |
| 7 | 羞比朱櫻熟 | 朱櫻の熟に比するを羞ぢ |
| 8 | 詎易紫梨津 | 詎ぞ紫梨の津に易へんや |
| 9 | 莫言蒂中久 | 蒂中の久しきを言ふ莫れ |
| 10 | 當看心裏新 | 當に心裏の新しきを見るべし |
| 11 | 微芳雖不足 | 微芳 足らざると雖も |
| 12 | 含咀願相親 | 含咀して相ひ親しまんことを願ふ |

《和譯》

- 1 陳乳などどうして貴ぶようなものであろうか
- 2 爛舌も珍重するようなものではない
- 3 これらは空しく美女の白い齒の色までも變えてしまう

- 4 ただ赤い唇を汚してしまっただけではないのだ
- 5 (そのような牛舌乳とは) 別に枝の無い木の實がある
- 6 これはかつて湛水のほとりの人に求めたものである
- 7 赤く熟したゆすらうめの實などは比べられるのも恥ずかしく
- 8 みずみずしい紫の梨でもとても取り替えることなどできょうか
- 9 長い閒帯たについていたとは言わないで
- 10 それよりも果實の中の新鮮さを看てほしい
- 11 かすかな香は物足りないかもしれないが
- 12 よく味わって食べてみて親しんでもらいたい

《解題》

「牛舌乳」「牛舌」は茱萸。オオバコ。オオバコ科の多年草。『毛詩』周南・茱萸の序に「茱萸、后妃之美也。和平則婦人樂有子矣」(茱萸は、后妃の美なり。和平なれば則ち婦人子有るを樂しむ)とあり、釋文に「郭璞云、江東呼爲蝦蟇衣。草木疏云、幽州人謂之牛舌」(郭璞云ふ、「江東呼びて蝦蟇衣と爲す」と。草木疏に云ふ、「幽州の人之を牛舌と謂ふ」と)という。しかし「牛舌乳」については不明。あるいは茱萸の實から作った飲料のようなのか。ただ茱萸は食用、あるいは薬として用いられるが、飲料となるものかどうかは定かではない。

「檳榔」木の名。ビンロウ。ヤシ科の常緑高木。實は鶏卵大で食用とされる。左思「吳都賦」(『文選』卷五)に

「檳榔無柯、椰葉無陰」(檳榔 柯無く、椰葉 陰無し)とあり、劉逵注に薛瑩の『荆揚已南異物志』を引き「檳榔樹、高六七丈、正直無枝、葉從心生、大如楯。其實作房、從心中出、一房數百實。實如鷄子皆有殼、肉滿殼中、正白、味苦澁。得扶留藤、與古賁灰合食之、則柔滑而美。交趾・日南・九眞皆有之」(檳榔樹、高さ六七丈、正直にして枝無く、葉 心從り生じ、大なること楯の如し。其の實 房を作し、心中從り出で、一房に數百實あり。實は鷄子の如く皆な殼有り、肉 殼中に滿ち、正白にして、味苦澁なり。扶留藤を得て、古賁灰と合して之を食はば、則ち柔滑にして美なり。交趾・日南・九眞皆な之れ有り)という。

この詩は、牛舌乳を求めた人がいたが、それが無かったので代わりに檳榔を贈ったということを詠じたものである。

《語釋》

1 陳乳何能貴 2 爛舌不成珍

「陳乳・爛舌」不明。あるいはともに詩題の「牛舌乳」を指すか。

「成珍」珍重される。「39報王永興觀田」の注を参照。

3 空持渝皓齒 4 非但汗丹唇

「皓齒・丹唇」白い齒と赤い唇。曹植「洛神賦」(『文選』卷一九)に「丹脣外朗、皓齒内鮮」(丹脣外に朗らかに、

皓齒内に鮮やかなり」とあり、美しい女性の形容に用いられる。

「渝」變える。白い齒の色を變える。

「汗」『詩紀』は「汗」に作るが、『漢魏六朝百三家集』『藝文類聚』によつて改めた。「汗」は「汚」の異体字。けがす。

この二句は「牛舌乳」が、美女の赤い唇だけでなく、白い齒までも汚してしまふことを言うのではないか。

5 別有無枝實 6 曾要湛上人

「無枝實」檳榔を指す。解題に引く左思「吳都賦」を参照。

「湛上人」「湛」は川の名。荊州を流れる。『漢書』地理志八上に「正南曰荊州。其山曰衡、藪曰雲夢、川曰江・漢、澗曰潁・湛」（正南を荊州と曰ふ。其山を衡と曰ひ、藪を雲夢と曰ひ、川を江・漢と曰ひ、澗を潁・湛と曰ふ）とある。「湛上人」は湛水のほとりの人。基づくものがあると思われるが不明。

7 羞比朱櫻熟 8 詎易紫梨津

「朱櫻熟」ユスラウメの實が熟したものの。

「紫梨津」紫色の梨のみずみずしいもの。

ともに左思「蜀都賦」（『文選』卷四）に「朱櫻春熟、素奈夏成。……紫梨津潤、榑栗罅發」（朱櫻春に熟し、素奈夏に成る。……紫梨津潤にして、榑栗罅發す）とある。

「易」かえる。取り替える。交換する。

この二句は、檳榔が朱櫻や紫梨と比べても良いものであることを言う。

9 莫言蒂中久 10 當看心裏新

「蒂」へた。果實が枝や莖につく部分。

「心裏」果實、あるいは蕾の中。沈約「詠新荷應詔詩」（『古詩紀』卷八四）に「寧知寸心裏、蓄紫復含紅」（寧ぞ知らん寸心の裏、紫を蓄へ復た紅を含むを）とある。

11 微芳雖不足 12 含咀願相親

「微芳」かすかな香。陸機「塘上行」（『文選』卷二八）に「江離生幽渚、微芳不足宣」（江離幽渚に生じ、微芳宣ぶるに足らず）とある。

「含咀」含み食らう。「含苴」に同じ。枚乘「梁王菟園賦」（『古文苑』卷三）に「芝成宮闕、枝葉榮茂。選擇純熟、挈取含苴」（芝宮闕を成し、枝葉榮茂す。純熟を選擇し、挈取して含苴す）とあり、章樵注に「苴與咀通。擇芝之軟脆者、以自含咀」（苴と咀と通ず。芝の軟脆なる者を選び、以て自ら含咀す）という。

41 夜不得眠 夜眠るを得ず

- 1 夜長愁反覆 夜長くして愁ひて反覆し
- 2 懷抱不能裁 懷抱 裁つ能はず
- 3 披衣坐惆悵 衣を披きて坐して惆悵し
- 4 當戸立徘徊 戸に當りて立ちて徘徊す
- 5 風音觸樹起 風音 樹に觸れて起り
- 6 月色度雲來 月色 雲を度わたりて來る
- 7 夏葉依窗落 夏葉 窗に依りて落ち
- 8 秋花當戸開 秋花 戸に當りて開く
- 9 光陰已如此 光陰 已かくに此の如し
- 10 復持憂自催 復た持して憂おのづかひ自ら催す

《和譯》

- 1 夜は長く愁いを抱いたまま何度も寝返りをうつが
- 2 この胸の内の思いを斷ち切ることはできない
- 3 衣を着て座つてはうれい悲しみ
- 4 戸口で立ちあがつてはあたりを歩き回る
- 5 風が樹に吹きつけて音をたて
- 6 月の光は雲を渡つて差し込んでくる
- 7 夏の葉はすでに窓邊に散つていき
- 8 秋の花が戸口のあたりで咲いている
- 9 時の過ぎゆくことはこのようであるため
- 10 抱いていた憂いがまたおのずとかき立てられるのだ

《解題》

夜に眠れないことを詠う。なお弟の劉孝先にこれに和

した「和兄孝綽夜不得眠詩」がある。

劉孝先「和兄孝綽夜不得眠詩」

- | | |
|-------|---|
| 夜愁眠不安 | 夜愁ひて眠りて安んぜず |
| 起望臺南端 | 起ちて臺の南端を望む |
| 葉慘風聲異 | 葉は慘 <small>そこな</small> はれて風聲異なり |
| 樓空月色寒 | 樓は空しくして月色寒し |
| 笙冷調簧數 | 笙は冷たくして簧を調ふること難 <small>しば</small> し |
| 弦脆上琴難 | 弦は脆くして琴を上ぐることに難 <small>しば</small> し |
| 百年行詎幾 | 百年 行くこと詎 <small>いくばく</small> 幾ぞ |
| 萬慮坐相攢 | 萬慮 坐 <small>そとら</small> に相ひ攢 <small>あつ</small> まる |
| 誰家有明鏡 | 誰が家にか明鏡有らば |
| 暫借照心看 | 暫 <small>しばら</small> く借りて心を照らして看ん |

《語釋》

1 夜長愁反覆 2 懷抱不能裁

「反覆」くり返すこと。ここでは「反側」に同じか。『毛詩』周南・關雎に「求之不得、寤寐思服。悠哉悠哉、輾轉反側」(之を求めて得ざれば、寤寐に思服す。悠なる哉、悠なる哉、輾轉反側す)とあるように、寝返りをうつこととをいう。

「懷抱」胸の内。謝靈運「富春渚」(『文選』卷二六)に「懷抱既昭曠、外物徒龍螭」(懷抱 既に昭曠として、外物 徒に龍螭たり)とある。

3 披衣坐惆悵 4 當戶立徘徊

「披衣」衣を着る。

「惆悵」愁え悲しむさま。宋玉「九辯」(『楚辭』卷八)に「廓落兮、羈旅而無友生。惆悵兮、而私自憐」(廓落たり、羈旅にして友生無し。惆悵たり、而して私に自ら憐む)とある。

「徘徊」歩き回る。

この二句については、「古詩十九首」其十九(『文選』卷二九)に「明月何皎皎、照我羅牀幃。憂愁不能寐、攬衣起徘徊」(明月何ぞ皎皎たる、我が羅牀幃を照らす。憂愁して寐ぬる能はず、衣を攬りて起ちて徘徊す)とあり、また魏文帝「雜詩二首」其一(『文選』卷二九)に「漫漫秋夜長、烈烈北風涼。展轉不能寐、披衣起彷徨」(漫漫として秋夜長く、烈烈として北風涼し。展轉として寐ぬる能はず、衣を披て起ちて彷徨す)とあり、これらを踏まえているのであろう。

5 風音觸樹起 6 月色度雲來

「風音觸樹起」風が木に吹き付けて音を立てる。『楚辭』

九歌・山鬼に「風颯颯兮木蕭蕭、思公子兮徒離憂」(風颯颯として木蕭蕭たり、公子を思へば徒に憂に離る)とある。また梁簡文帝「和湘東王三韻二首・春宵」(『玉臺新詠』卷七)に「風聲隨篠韻、月色與池同」(風聲篠に隨ひて韻き、月色池と同じ)とある。

「月色度雲來」月の光が雲を越えてくる。北周・王褒「詠

月贈人詩」(『古詩紀』卷一二三)に「渡雲光忽駛、中天影更遲」(雲を渡りて光忽ち駛せ、天に中りて影更に遲し)とある。

9 光陰已如此 10 復持憂自催

「光陰」時の過ぎゆくこと。江淹「別賦」(『文選』卷一六)に「明月白露、光陰往來。與子之別、思心徘徊」(明月白露、光陰往來す。子と之れ別れて、思心徘徊す)とある。

「催」うながす。かき立てる。

42 望月有所思

月を望みて思ふ所有り

- | | | | |
|----|-------|----|-----------|
| 1 | 秋月始織織 | 秋月 | 始めて織織たり |
| 2 | 微光垂步簷 | 微光 | 步簷に垂る |
| 3 | 腫朧入牀簾 | 腫朧 | として牀簾に入り |
| 4 | 髣髴鑿窗簾 | 髣髴 | として窗簾を鑿らす |
| 5 | 簾螢隱光息 | 簾螢 | 光を隠して息ひ |
| 6 | 簾蟲映光織 | 簾蟲 | 光に映じて織る |
| 7 | 玉羊東北上 | 玉羊 | 東北に上り |
| 8 | 金虎西南昃 | 金虎 | 西南に昃く |
| 9 | 長門隔清夜 | 長門 | 清夜に隔てられ |
| 10 | 高堂夢容色 | 高堂 | 容色を夢む |

- 11 如何當此時 如何せん 此の時に當りて
 12 懷情滿胸臆 情を懷きて胸臆に滿つるを

《和譯》

- 1 秋の月は細くなつたばかりで
 2 かすかな光が廊下に差し込んでくる
 3 少しずつ寢台のあたりが明るくなってきて
 4 ぼんやりとして窓の簾を照らしている
 5 その簾の側で螢は光を隠してやすみ
 6 また簾の側で蜘蛛が光に照らされて絲を張って巢を作
 っている
 7 玉羊星は東北の空に上っていき
 8 太白星は西南に傾いている
 9 長門宮で（私はひとり）この清らかな夜に隔てられ
 10 高堂に、あなたのことを夢に見るばかりです
 11 どうすればいいのでしょうか、今この時に
 12 私の内にある思いが胸に滿ちあふれてくるのを

《解題》

「有所思」樂府題の一つ。思い慕う人があることを詠った戀愛の歌である。『樂府詩集』卷一八。

《語釋》

- 1 秋月始織織 2 微光垂步簷

「織織」月の細いさま。鮑照「翫月城西門解中」『文選』

卷三〇）に「始見西南樓、織織如玉鉤」（始め西南の樓に見^{あらは}れ、織織として玉鉤の如し）とある。

「步簷」「步欄」「步檐」に同じ。廊下。司馬相如「上林賦」（『文選』卷八）に「步欄周流、長途中宿」（步欄周流して、長途中宿す）とあり、李善注に「步欄、步廊也」（步欄は、步廊なり）という。また謝莊「宋孝武宣貴妃誄序」（『文選』卷五七）に「巡步檐而臨蕙路、集重陽而望椒風」（步檐を巡りて蕙路に臨み、重陽に集まりて椒風を望む）とある。

3 瞳朧入牀簾 4 髣髴鑿窗簾

「瞳朧」「瞳朧」に同じ。明るくなりかけるさま。陸機「文賦」（『文選』卷一七）に「其致也、情瞳朧而彌鮮、物昭晰而互進」（其の致すや、情瞳朧として彌いよ鮮やかに、物昭晰として互に進む）とあり、李善注に「埤蒼曰、瞳朧、欲明也」（埤蒼に曰く、「瞳朧は、明らかならんと欲するなり」と）という。

「牀簾」寢台。寢床。梁・謝幾卿「答湘東王書」（『梁書』文學傳）に「徒以老使形疏、疾令心阻、沈滯牀簾、彌歷七旬」（徒らに老は形をして疏ならしめ、疾は心をして阻ならしむるを以て、牀簾に沈滯し、彌いよ七旬を歴たり）とある。

「髣髴」ぼんやりしたさま。『楚辭』九章・悲回風に「存髣髴而不見兮、心踊躍其若湯」（存^あること髣髴として見えず、心踊躍して其れ湯の若し）とあり、王逸注に「髣髴、

謂形貌也。一云、不得見」(髣髴は、形貌を謂ふなり。一に云ふ、見るを得ずと)という。また江淹「雜體詩・潘黃門悼亡」(『文選』卷三二)に「明月入綺窗、髣髴想蕙質」(明月 綺窗に入り、髣髴として蕙質を想ふ)とある。

5 簾螢隱光息 6 簾蟲映光織

「簾螢隱光息」簾の側で螢がやすんでいる。あるいは次の謝朓の詩を踏まえるか。謝朓「玉階怨」(『樂府詩集』卷四三)に「夕殿下珠簾、流螢飛復息。長夜縫羅衣、思君此何極」(夕殿 珠簾を下し、流螢 飛びて復た息ふ。長夜 羅衣を縫ひ、君を思ふこと此れ何ぞ極まらん)とある。「簾蟲映光織」簾の側で蟲(蜘蛛)が巢を作っている。「織」とは蜘蛛が巢を作することを指す。沈約「學省愁臥」(『文選』卷三〇)に「網蟲垂戶織、夕鳥傍欄飛」(網蟲 戸に垂れて織り、夕鳥 欄に傍ひて飛ぶ)とある。

7 玉羊東北上 8 金虎西南昃

「玉羊」『大漢和辭典』では月の異名といい、『漢語大詞典』天狼星の異稱という。ここでは星の名ととる。『宋書』符瑞志下に「玉羊・師曠時來至」(玉羊・師曠は時に來り至る)とある。

「金虎」太白星をいう。陸機「答賈長淵」(『文選』卷二四)に「大辰匿耀、金虎習質」(大辰 耀を匿し、金虎 質を習ぬ)とあり、李善注に「石氏星經曰、昴者、西方白虎之宿也。太白者、金之精。太白入昴、金虎相薄、主有

兵亂」(石氏星經に曰く、「昴とは、西方白虎の宿なり。太白とは、金の精なり。太白 昴に入り、金虎 相ひ薄れば、主に兵亂有り」と)という。

9 長門隔清夜 10 高堂夢容色

「長門」長門宮。司馬相如に「長門賦」(『文選』卷一六)があり、その序に「孝武皇帝陳皇后、時得幸、頗妒。別在長門宮、愁悶悲思」(孝武皇帝の陳皇后、時に幸を得、頗る妒む。別に長門宮に在りて、愁悶 悲思す)とある。「夢容色」相手の姿を夢に見る。劉孝綽「古意」(『古詩紀』卷九四)に「相思昏望絕、宿昔夢容光」(相ひ思ふも昏に望み絶え、宿昔 容光を夢む)とある。劉孝綽詩譯注(6)(『中國古典文學研究』第5號)を参照

11 如何當此時 12 懷情滿胸臆

「懷情」情を内に抱く。あるいは内に抱いた情。顏延之「五君詠五首・劉參軍」(『文選』卷二二)に「劉靈善閉關、懷情滅聞見」(劉靈は善く關を閉ぢ、情を懷きて聞見を滅す)とあり、李善注に「說文曰、懷、藏也」(說文に曰く、「懷は、藏なり」と)という。

「胸臆」むね。王粲「登樓賦」(『文選』卷一一)に「循階除而下降兮、氣交憤於胸臆」(階除に循ひて下り降れば、氣 胸臆に交憤す)とあり、李善注に「說文曰、臆、胸也」(說文に曰く、「臆は、胸なり」と)という。

43 校書祕書省對雪詠懷

書を祕書省に校し 雪に對して懷を詠ず

- 1 桂華殊皎皎 桂華 殊に皎皎たり
 2 柳絮亦霏霏 柳絮 亦た霏霏たり
 3 詎比咸池曲 詎ぞ比せん 咸池の曲に
 4 飄飄千里飛 飄飄として 千里飛ぶに
 5 恥均班女扇 班女の扇に均しきを恥ぢ
 6 羞儷曹人衣 曹人の衣に儷ぶを羞づ
 7 浮光亂粉壁 浮光 粉壁に亂れ
 8 積照朗彤闈 積照 彤闈に朗らかなり
 9 鵲鵲搖羽至 鵲鵲 羽を搖らして至り
 10 鶻鶻拂翅歸 鶻鶻 翅を拂ひて歸る
 11 相彼猶自得 彼の猶ほ自ら得たるを相て
 12 嗟余獨有違 余の獨り違ふ有るを嗟く
 13 終朝守玉署 終朝 玉署を守り
 14 方夜勞石扉 夜に方りて石扉に勞せり
 15 未能奏絃綺 未だ絃綺を奏する能はず
 16 何由辨國圍 何に由りてか國圍を辨ぜん
 17 坐銷風露質 坐に銷ゆ 風露の質
 18 遊聯珠璧暉 遊び聯なる 珠璧の暉
 19 偶懷笨車是 偶たま笨車の是なるを懷ひ
 20 良知高蓋非 良に高蓋の非なるを知る

- 21 既言謝端木 既に言ひて端木に謝す
 22 無爲陳巧機 巧機を陳ぶるを爲す無からん

《和譯》

- 1 月はひとときわ皎皎と白く光っており
 2 柳絮もまたひらひらと舞っている
 3 しかしどうして比べられようか、咸池のほとりで
 4 雪が飄々と千里にわたって飛んでいるのに
 5 班婕妤の扇に均しいとされることを恥ずかしく思い
 6 曹の人の衣と並べられることも羞じている
 7 降り散る雪の光は白い壁のところで亂れ舞い
 8 積もった雪の白い輝きは役所の赤い門に明らかに映え
 9 ている
 9 鵲鵲は羽を搖らして飛んでいき
 10 鶻鶻は翼を拂って飛んで歸っていく
 11 それらの鳥がそれぞれ自らあるべき所を得ているのを
 12 見て
 12 私獨りが違う所にいることを嘆いている
 13 朝早くから役所に入って
 14 夜になつてもまだそこで仕事に苦勞している
 15 しかしいまだ文書を奏上することもできず
 16 どうして天下國家のことを論ずることができようか
 17 雪は風や露のようにはかなく消えていくが
 18 時には璧玉が連なるように輝いている
 19 ふと粗末な車が良いと思うようになり

- 20 高い笠の車は決して良いものではないと分かった
 21 かつて老人が子貢に断つたように
 22 あれこれ知恵を巡らすようなことを言うのはもうやめよう

《解題》

「校書」文書などを校正すること。また官名。祕書省の下に校書郎が置かれる。

「祕書省」役所の名。劉孝綽は天監七、九年頃に祕書丞となり、晩年に祕書監となつて没している。

この詩は、祕書省において仕事をしている時に、雪を見て思いを詠じたものである。

《語釋》

1 桂華殊皎皎 2 柳絮亦霏霏

「桂華」月中に桂があると言われることから、月を指す。

梁簡文帝「望月詩」(『古詩紀』卷七九)に「桂花那不落、團扇與誰裝」(桂花 那ぞ落ちざる、團扇 誰の與にか装はん)とある。

「皎皎」月の白く輝くさま。「古詩十九首」其十九(『文選』卷二九)に「明月何皎皎、照我羅床幃」(明月 何ぞ皎皎たる、我が羅床幃を照らす)とある。

「柳絮」柳の種子に生じる白い綿状の毛。風に吹かれて一面に亂れ飛ぶ。

「霏霏」雪の降るさま。ここでは柳絮の様子。『毛詩』小

雅・采薇に「昔我往矣、楊柳依依。今我來思、雨雪霏霏」(昔我 往きしとき、楊柳 依依たり。今我 來るに、雪雨ること霏霏たり)とある。

3 詎比咸池曲 4 飄飄千里飛

「咸池」日の浴する所。『楚辭』離騷に「飲余馬於咸池兮、總余轡乎扶桑」(余が馬を咸池に飲ひ、余が轡を扶桑に總ぶ)とあり、王逸注に「咸池、日浴處也」(咸池は、日の浴する處なり)という。ここでは祕書省の近くにある池を「咸池」と稱しているのではないか。

「飄飄」風にひるがえるさま。曹植「洛神賦」(『文選』卷一九)に「髣髴兮若輕雲之蔽月、飄飄兮若流風之迴雪」(髣髴たること輕雲の月を蔽ふが若く、飄飄たること流風の雪を迴らすが若し)とある。

5 恥均班女扇 6 羞儷曹人衣

「班女扇」班婕妤の扇。班婕妤「怨歌行」(『文選』卷二七)に「新裂齊紈素、皎潔如霜雪。裁爲合歡扇、團團似明月」(新に齊の紈素を裂けば、皎潔として霜雪の如し。裁ちて合歡の扇と爲せば、團團として明月に似たり)とあるのに基づく。

「曹人衣」曹の国の人の衣。『毛詩』曹風に詠われる衣を指す。『毛詩』曹風・蟋蟀に「蟋蟀掘閱、麻衣如雪」(蟋蟀 掘閱し、麻衣 雪の如し)とあり、毛傳に「如雪、言鮮絜」(雪の如しとは、鮮絜なるを言ふ)という。また謝

惠連「雪賦」(『文選』卷一三)に「曹風以麻衣比色、楚謠以幽蘭儷曲」(曹風は麻衣を以て色を比べ、楚謠は幽蘭を以て曲を儷ぶ)とある。

この二句は、雪の白さは「班女扇」や「曹人衣」によく譬えられるが、本来はそれ以上であることをいう。

7 浮光亂粉壁 8 積照朗形闈

〔浮光〕舞い散る雪の白い光。

〔粉壁〕胡粉で塗った壁。白い壁。顧野王「舞影賦」(『初學記』卷一五)に「圖長袖于粉壁、寫纖腰于華堂」(長袖を粉壁に圖き、纖腰を華堂に寫す)とある。

〔積照〕積もった雪の白い輝き。

〔形闈〕赤く塗った宮門。役所を指す。謝朓「訓王晉安」(『文選』卷二六)に「拂霧朝青閣、日旰坐形闈」(霧を拂ひて青閣に朝し、日旰けて形闈に坐す)とある。

9 鵲鴿搖羽至 10 鵲鴿拂翅歸

〔鵲鴿〕鳥の名。小鳥。「脊令」に同じ。『毛詩』小雅・小宛に「題彼脊令、載飛載鳴」(彼の脊令を題るに、載ち飛び載ち鳴く)とある。

〔鵲鴿〕鳥の名。鳥の一種。

11 相彼猶自得 12 嗟余獨有違

〔自得〕自らその性を得る。あるべき場所を得る。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「鵲鴿秋棲、鶻鶻春鳴」(鵲鴿

鶻鶻秋に棲み、鶻鶻春に鳴く)とあり、李善注に「爾雅曰、鶻斯、鶻鶻。郭璞曰、鶻鶻、匹鳥、腹下白也。……秋棲、春鳴、謂各得其性也」(爾雅に曰く、「鶻斯は、鶻鶻なり」と。郭璞曰く、「鶻鶻は、匹鳥、腹下の白きなり」と。……秋棲、春鳴は、各おの其の性を得たるを謂ふなり)という。

13 終朝守玉署 14 方夜勞石扉

〔終朝〕朝。『毛詩』小雅・采緑に「終朝采緑、不盈一掬」(終朝 緑を采るも、一掬に盈たず)とあり、毛傳に「自旦及食時爲終朝」(旦自り食時に及ぶを終朝と爲す)とある。

〔玉署〕役所をいう。梁簡文帝「仰和衛尉新渝侯巡城口號詩」(『古詩紀』卷七九)に「玉署清餘熱、金城含暮秋」(玉署 餘熱を清くし、金城 暮秋を含む)とある。

〔方夜〕夜。梁元帝「縣名詩」(『古詩紀』卷八〇)に「此時方夜飲、平臺傳羽卮」(此の時 夜に方りて飲み、平臺に羽卮を傳ふ)とある。

〔石扉〕「石扇」に同じ。役所の扉。役所をいう。江總「梁故度士尚書陸君誄」(『全隋文』卷一一)に「平臺累陟、石扇暫履」(平臺 累りに陟り、石扇 暫く履む)とある。

15 未能奏絺綺 16 何由辨國圍

〔絺綺〕浅黄色の絹。「絺素」に同じく文書書籍をいう。王筠「昭明太子哀册文」(『梁書』昭明太子傳)に「遍該絺素、殫極丘墳」(遍く絺素を該へ、殫く丘墳を極む)と

ある。

「國圍」不明。あるいは「國圖」に同じか。「國圖」は國家の版圖。轉じて國家をいう。沈約「從齊武帝琅琊城講武應詔詩」(『古詩紀』卷八四)に「展事昌國圖、息兵由重戰」(事を展べて國圖を昌んにし、兵を息ふは戰を重ぬるに由る)とある。また『文苑英華辨證』は「國圍」に作る。「圍」は尚書省の門をいう。

17 坐銷風露質 18 遊聯珠璧暉

「銷」消える。盡きる。

「風露質」はかないものを喩えるか。時代は降るが唐の李白「長歌行」(『李太白全集』卷六)に「金石猶銷鑠、風霜無久質」(金石も猶ほ銷鑠す、風霜に久質無し)とある。

「珠璧」珍珠璧玉。美しい寶玉。

この二句は、また雪の様子をいうが、あるいはそこに作者自身を重ね合わせていると見ることもできる。はかない資質の自分が、珍珠や璧玉のような優れた人に連なることができたことを述べているのではないだろうか。

19 偶懷笨車是 20 良知高蓋非

「笨車」粗末な車。『宋書』顏延之傳に「常乘羸牛笨車、逢峻鹵簿、即屏往道側」(常に羸牛笨車に乗り、峻の鹵簿に逢へば、即ち道側に屏往す)とある。

「高蓋」高い衣笠の車。貴人の乗る車を指す。謝朓「鼓吹曲」(『文選』卷二八)に「凝笳翼高蓋、疊鼓送華輶」

(凝笳 高蓋を翼り、疊鼓 華輶を送る)とある。

21 既言謝端木 22 無爲陳巧機

「謝」ことわる。辭退する。

「端木」端木賜、字は子貢。孔子の弟子。

「巧機」「機巧」に同じ。知恵を巡らして考えること。江淹「雜體詩・孫廷尉雜述」(『文選』卷三一)に「疊疊玄思清、胸中去機巧」(疊疊として玄思清く、胸中より機巧を去る)とある。

これは『莊子』に基づく。すなわち天地篇に「子貢南遊於楚、反於晉、過漢陰、見一丈人。方將爲圃畦、鑿隧而入井、抱甕而出灌。搨掎然用力甚多、而見功寡。子貢曰、有械於此。一日浸百畦、用力甚寡、而見功多。夫子不欲乎。爲圃者叩而視之曰、奈何。曰、鑿木爲機、後重前輕、挈水若抽、數如沃湯、其名爲槩。爲圃者忿然作色而笑曰、吾聞之吾師。有機械者必有機事、有機事者必有機心、機心存於胸中、則純白不備。純白不備、則神生不定。神生不定者、道之所不載。吾非不知、羞而不爲也。子貢瞞然慙、俯而不對」(子貢南のかた楚に遊び、晉に反るに、漢陰を過り、一丈夫を見る。方將に圃畦を爲さんとし、隧を鑿ちて井に入り、甕を抱きて出でて灌ぐ。搨掎然として力を用ふること甚だ多く、而も功を見ること寡し。子貢曰く、「此に械有り。一日に百畦を浸し、力を用ふること甚だ寡く、而も功を見ること多し。夫子欲せざるか」と。圃を爲す者叩ぎて之を視て曰く、「奈何」

と。曰く、「木を鑿ちて機を爲し、後は重く前は軽く、水を挈ること抽くが若く、數かなること洗湯の如し、其の名を樺と爲す」と。圃を爲す者忿然として色を作して笑ひて曰く、「吾之を吾が師に聞く。『機械有る者は必ず機事有り、機事有る者は必ず機心有り、機心胸中に存せば、則ち純白備はらず。純白備はらずんば、則ち神生定まらず。神生定まらざる者は、道の載らざる所なり』と。吾知らざるに非ず、羞ちて爲さざるなり」と。子貢瞞然として慙ち、俯して對へず」とある。

44 詠百舌 百舌を詠ず

- 1 山人惜春暮 山人 春暮を惜しみ
- 2 旭旦坐花林 旭旦に花林に坐す
- 3 復値懷春鳥 復た値ふ 懷春鳥の
- 4 枝閒弄好音 枝閒に好音を弄すに
- 5 遷喬聲迴出 喬に遷りて 聲は迴かに出で
- 6 赴谷響幽深 谷に赴きて 響は幽深たり
- 7 下聽長而短 下に聽けば 長くして短く
- 8 時聞絶復尋 時に聞けば 絶えて復た尋づ
- 9 孤鳴若無對 孤鳴 對無きが若く
- 10 百轉似羣吟 百轉 羣吟に似たり
- 11 昔聞屢歡昔 昔聞けば 屢しば昔を歡び

- 12 今聽忽悲今 今聽けば 忽ち今を悲しむ
- 13 聽聞非殊異 聽聞 殊に異なるに非ず
- 14 遲暮獨傷心 遲暮 獨り心を傷ましむ

《和譯》

- 1 山中の人は晩春を惜しみ
- 2 明け方に花の林に座っている
- 3 また春を思う鳥が
- 4 枝の間で好音を響かせるのに出會つた
- 5 高い枝に遷り飛ぶと聲は遠くまで届き
- 6 谷に赴いていくと響きもまた奥深くなる
- 7 下の方で聲が長くまた短かくなったりするのが聞こえ
- 8 時に途絶えてはまた續いていくのが聞こえてくる
- 9 一羽で鳴いており、連れ合はいないようだが
- 10 百たびさええずつて羣で鳴いているかのようである
- 11 昔聞いた時はとても歡ばしいものであったが
- 12 今聽いてみるとたちまち悲しくなってしまう
- 13 聽いている聲が異なっているのではない
- 14 時が過ぎて年老いてしまい獨り心を傷めているからなのだ

《解題》

「百舌」反舌鳥。モズ。『禮記』月令に「仲夏之月……小暑至、螳螂生、鵙始鳴、反舌無聲。」（仲夏の月……小暑至り、螳螂生じ、鵙始めて鳴き、反舌聲無し）とあり、鄭注に「反舌、百舌鳥」（反舌は、百舌鳥なり）とあ

り、孔穎達疏に「反舌鳥、春始鳴、至五月稍止。其聲數轉、故名反舌」(反舌鳥、春に始めて鳴き、五月に至りて稍く止む。其の聲數しば轉じ、故に反舌と名づく)とある。

《語釋》

1 山人惜春暮 2 旭旦坐花林

「山人」山中に隱遁する人。孔稚珪「北山移文」(『文選』卷四三)に「蕙帳空兮夜鵲怨、山人去兮曉猿鳴」(蕙帳空しくして夜鵲怨み、山人去りて曉猿鳴く)とある。

「春暮」春の末。晩春。

「旭旦」明け方。任昉「苦熱詩」(『詩紀』卷八八)に「旭旦煙雲卷、列景入東軒」(旭旦に煙雲巻き、列景東軒に入る)とある。

3 復值懷春鳥 4 枝閒弄好音

「懷春鳥」百舌を指す。百舌が春に鳴き始めることからいう。沈約「反舌賦」(『藝文類聚』卷九二)に「眷春物而懷之、聞好音於庭樹」(春物を眷みて之を懷ひ、好音を庭樹に聞く)とある。

「弄好音」鳥が鳴くこと。嵇康「贈秀才入軍五首」其二(『文選』卷二四)に「咬咬黃鳥、顧矚弄音」(咬咬たる黃鳥、矚を顧み音を弄す)とあり、李善注に「古歌曰、黃鳥鳴相追、咬咬弄好音」(古歌に曰く、「黃鳥鳴きて相ひ追ひ、咬咬として好音を弄す」と)という。

5 遷喬聲迴出 6 赴谷響幽深

「遷喬」高い木に飛び移る。『毛詩』小雅・伐木に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷于喬木」(木を伐ること丁丁、鳥鳴くこと嚶嚶たり。幽谷自り出で、喬木に遷る)とある。

「幽深」静かで奥深い。禰衡「鸚鵡賦」(『文選』卷一三)に「故其嬉游高峻、栖峙幽深」(故に其れ高峻に嬉游し、幽深に栖峙す)とある。

9 孤鳥若無對 10 百轉似羣吟

「百轉」「轉」はさえずる。『藝文類聚』卷九二に引く『易緯通卦』に「百舌者、反舌鳥也。能反覆其口、隨百鳥之音」(百舌は、反舌鳥なり。能く其の口を反覆し、百鳥の音に隨ふ)とある。

13 聽聞非殊異 14 遲暮獨傷心

「遲暮」年老いることをいう。『楚辭』離騷に「惟草木之零落兮、恐美人之遲暮」(草木の零落するを惟ひ、美人の遲暮を恐る)とある。

「獨傷心」獨りで心を傷める。阮籍「詠懷十七首」其一(『文選』卷二二)に「徘徊將何見、憂思獨傷心」(徘徊して將た何をか見る、憂思して獨り心を傷ましむ)とある。

45 侍宴同劉公幹應令

宴に侍して劉公幹に同じくす令に應ず

- | | | | |
|---|-------|-------|---------|
| 1 | 副君西園宴 | 副君 | 西園に宴し |
| 2 | 陳王謁帝歸 | 陳王 | 帝に謁して歸る |
| 3 | 列位華池側 | 列位す | 華池の側 |
| 4 | 文雅縱橫飛 | 文雅 | 縱橫に飛ぶ |
| 5 | 小臣輕蟬翼 | 小臣 | 蟬翼よりも軽く |
| 6 | 黽勉謬相追 | 黽勉として | 謬りて相ひ追ふ |
| 7 | 置酒陪朝日 | 置酒して | 朝日に陪し |
| 8 | 淹留望夕霏 | 淹留して | 夕霏を望む |

《和譯》

- 1 太子は西園で宴を催され
- 2 陳王は帝に拜謁して歸ろうとされる
- 3 華池の側に並び連なつて
- 4 ここでは文學がほしいままに飛び交っている
- 5 小臣たる私は蟬の翼よりも軽く
- 6 つとめ励んで何かの間違いでここに從っている
- 7 朝日とともに始まつた酒宴に私はお供し
- 8 長い間ここに留まつて今は夕暮れのもやを眺めている

《解題》

「同」『百三家集』は「擬」に作る。

「劉公幹」劉楨。公幹は字。建安七子の一人。
宴席において、劉楨の詩に擬して作られたものである。

《語釋》

1 副君西園宴 2 陳王謁帝歸

「副君」太子をいう。『漢書』疏廣傳に「太子國儲副君、師友必於天下英俊」（太子は國儲の副君にして、師友は必ず天下の英俊に於てす）とある。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首・平原侯植」（『文選』卷三〇）に「副君命飲宴、歡娛寫懷抱」（副君 飲宴を命じ、歡娛して懷抱を寫ぐ）とあり、李善注に「副君、謂文帝也」（副君は、文帝を謂ふなり）という。ここでは昭明太子を魏文帝曹丕になぞらえている。

「西園」曹丕や曹植が遊宴を行った庭園。曹植「公讌詩」（『文選』卷二〇）に「清夜遊西園、飛蓋相追隨」（清夜西園に遊び、蓋を飛ばして相ひ追隨す）とあり、また魏文帝「芙蓉池作」（『文選』卷二二）に「乘輦夜行遊、逍遙步西園」（輦に乗りて夜行遊し、逍遙として西園を歩む）とある。

「陳王」陳思王曹植をいう。ここでは太子の弟である晉安王蕭綱か湘東王蕭繹を指す。

「謁帝歸」天子にまみえて歸る。曹植「贈白馬王彪」（『文選』卷二四）に「謁帝承明廬、逝將歸舊疆」（帝に承明廬に謁し、逝きて將に舊疆に歸らんとす）とあるのに基づく。

この二句を見るに、この詩は晉安王、あるいは湘東王

が任地に歸ろうとする際、昭明太子が開いた宴席において作られたものではないかと思われる。

3 列位華池側 4 文雅縱橫飛

「華池」美しい池。江淹「雜體詩・魏文帝遊宴」(『文選』卷三二)に「置酒坐飛閣、逍遙臨華池」(置酒して飛閣に坐し、逍遙として華池に臨む)とあり、李善注に「魏文帝東門行曰、朝游高臺側、夕宴華池陰」(魏文帝の東門行に曰く、「朝に高臺の側に遊び、夕に華池の陰に宴す」と)という。

「文雅縱橫飛」文學が思うままに作られ飛び交っている。この句はそのまま劉楨「贈五官中郎將四首」其四(『文選』卷三三)に「君侯多壯思、文雅縱橫飛」(君侯 壯思多く、文雅 縱橫に飛ぶ)とある。

5 小臣輕蟬翼 6 黽勉謬相追

「小臣」自らをいう。

「輕蟬翼」蟬の翼よりも軽い。自らを謙遜して言う。潘岳「河陽縣作二首」其一(『文選』卷二六)に「微身輕蟬翼、弱冠忝嘉招」(微身 蟬翼よりも軽く、弱冠にして嘉招を忝くす)とあり、李善注に「曹植表曰、身輕蟬翼、恩重丘山」(曹植の表に曰く、「身 蟬翼よりも軽く、恩 丘山よりも重し」と)という。

「黽勉」勤めはげむさま。「僈俛」に同じ。

この二句は、劉楨「贈五官中郎將四首」其四(『文選』

卷三三)に「小臣信頑鹵、僈俛安能追」(小臣 信に頑鹵なり、僈俛たるも安んぞ能く追はん)とあるのを踏まえる。

7 置酒陪朝日 8 淹留望夕霏

「置酒」酒宴をする。

「淹留」久しく留まる。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首・徐幹」(『文選』卷三〇)に「置酒飲膠東、淹留憩高密」(置酒して膠東に飲み、淹留して高密に憩ふ)とある。「夕霏」夕暮れのもや。謝靈運「石壁精舍還湖中作」(『文選』卷三二)に「林壑斂暝色、雲霞收夕霏」(林壑 暝色を斂め、雲霞 夕霏を收む)とあり、李善注に「霏、雲飛貌」(霏は、雲の飛ぶ貌なり)という。

46 賦詠百論捨罪福詩

百論もて罪福を捨つるを賦し詠ずる詩

- | | | |
|---------|---------------|-----------|
| 1 尋因途乃異 | 因を尋ねて | 途は乃ち異なり |
| 2 及捨趣猶并 | 捨に及びて | 趣は猶ほ并ふ |
| 3 苦極降歸樂 | 苦極まれば | 降りて樂に歸するも |
| 4 樂極苦還生 | 樂極まれば | 苦 還た生ず |
| 5 豈非輪轉愛 | 豈に輪轉の愛に非ざらんや | |
| 6 皆緣封著情 | 皆な封著の情に緣る | |
| 7 一知心相濁 | 一たび心相の濁れるを知れば | |

8 樂染法流清 法流の清きに染まるを樂しまん

《和譯》

- 1 因縁を尋ねていくと道はそれぞれ異なるが
- 2 罪福を捨て去ると衆生の赴く所は合するのである
- 3 苦しみが極まると、やがては樂に歸するが
- 4 樂しみが極まると、また苦しみが生ずることになる
- 5 どうして輪廻轉生への愛着ではないことがあるのか
- 6 これらはみな、ものに執着する情によっているのである
- 7 ひとたび我が心が濁っていることを知ったのなら
- 8 佛法の清き流れに染まって樂しみたいものだ

《解題》

「百論」書名。二卷。鳩摩羅什譯。龍樹（ナーガールジュナ）の弟子提婆（アーリヤデーヴァ）が、師の中論に則して無自性・空の教義を宣揚し、他の哲学・宗教諸派の説を論破する論書。

「罪福」罪惡と福德。五逆十惡などは悪い果報を招き、衆生をそこなうゆえに惡であるとし、五戒十善などは善い果報を招き、衆生を富樂にするので福であるとする。

この詩は『百論』の書によって罪惡・福德などの一切を捨て去ることを詠じたものであるう。

《語釋》

1 尋因途乃異 2 及捨趣猶并

〔因〕原因となるもの。因縁。由縁。

〔趣〕衆生の赴く所をいう。

〔捨〕煩惱などを滅し捨て去ること。罪福を捨てること。

〔并〕合う。合する。

3 苦極降歸樂 4 樂極苦還生

この二句は苦と樂とが代わる代わるめぐってくることをいうか。謝靈運「曇隆法師誄」(『廣弘明集』卷二三)に「苦樂環迴、終卒代謝」(苦樂環迴りて、終卒には代謝す)とある。

5 豈非輪轉愛 6 皆緣封著情

「輪轉」生死をくり返す。「輪迴」に同じ。謝靈運「佛影銘」(『廣弘明集』卷一五)に「逆還未已、輪轉在己」(逆還未だ已まず、輪轉して己に在り)とある。

「愛」あることに執着すること。愛着。貪欲なこと。

「封著」かたく執着すること。沈約「均聖論」(『廣弘明集』卷五)に「内聖外聖、義均理一、而蔽理之徒、封著外教」(内聖外聖、義は均しく理は一なるも、蔽理の徒は、外教に封著す)とある。

7 一知心相濁 8 樂染法流清

「心相」心のあり方。心のすがた。梁武帝「槃經疏序」(『廣弘明集』卷二〇)に「離文字以設教、忘心相以通道」(文字を離れて以て教を設け、心相を忘れて以て道に通

ず) とある。

「法流」佛法が相續して絶えないことを水の流れに喩えていう。王巾「頭陀寺碑文」(『文選』卷五九)に「媚茲邦后、法流是挹」(媚うるはしきかな茲この邦の后、法流を是れ挹くむ) とある。